カメちがい

mikatuki98

「もしもし、カメさんですか？」
　電話の向こうから何となく耳覚えの有るような無いような声が聞こえて来た。
「はい、カメですが……」
「わたしです！　ウサギです。その節はお世話になりました」
「はぁ、どの節かは知りませんが、どうも」
「いやぁ～　お忘れですか？　あの節ですよ！」
「はぁ、あの節と言われましても……」
「まぁ、カメさんも物忘れが宜しいようで。ははは！」
「ははは って……　私が知ってるウサギさんは海でワニに襲われて、 大国主命さまに助けて貰ったという、因幡の白兎さんですけど？　おたく、何処のウサギさんですの？」
「えぇえぇ～～～　それっていつの時代のウサギですか？　てか、神話じゃないですか！？」
「いいえ、神話と呼ばれている実話ですけど？」
「えぇえぇ～～～　実話ってことは、カメさんはそのウサギさんと知り合いってことですか？」
「えぇまぁ、知り合いって言いますか、私が親しかったのは大国主命さまの方ですけどね」
「えぇえぇ～～～　ってことは、あなた一体何年生きているんですか？」
「何年て、そりゃあカメってくらいですから万年ですよ」
「ははは！　またまたご冗談を……」
「あの、わたし真面目なカメですので、あまり冗談とか言いませんが……」
「ぶはっ！　そそそれが冗談ぽいんですよ。ははは」
「で、おたく、何処のカメさんと間違っているんです？」
「え？　てことは、やっぱりあのカメさんじゃない？　……おかしいなぁ～確かこの番号で良かった筈なんだけどなぁ～」
「じゃあ、おたくがお掛けになった電話番号を確認のために言ってくださいな」
「え～っと、もし・もし・かめ・よ・かめ・さん・よ・せか・いの・うち・で・おま・え・ほど」
「ふむ。其処までは合ってますねぇ……　で、その後は？」
「え～っと、チョット待って下さいよ～　え～っと、メモ用紙は……　あったあった、あゆ・みの・のろ・い」
「あっ！　其処です！　ソコ！　違ってますよ！！」
「え？　何処です？」
「あゆ・みの・のろ・い　じゃなくて、あゆ・みの・はや・い、ですから！」
「はぁ？　はや・い、ですかぁ？」
「そうですよ！　今何世紀だと思ってるんです？　ウサギのくせに遅れてますねぇ～全く」
「……」
「そんなことだから、ウサギはカメに遅れを取ったんですよ！　ははははは」
「ははははは って、あなたやっぱりあの時のカメさんじゃないですか！？」
「いや、だから私じゃないですって」

「でも、私がカメに遅れを取ったとか言ったじゃないですか！？」
「いや、あなたが、とは言っていませんよ」
「じゃあ、何で知ってるんですか？」
「だ・か・ら　私は万年生きてるんですって！　自慢じゃないけどあなたよりは沢山の事を知ってますから」
「じゃあ、私が電話を掛けたかった本当のカメさんの電話番号を教えて下さい！」
「本当って、私も本物のカメ……　いや、だから、おたくは、＜のろ・い＞にかけなくちゃいけないところを、＜はや・い＞にかけて、わたしが出ちゃったんでしょ！？　だから？」
「だから？　……２１世紀のカメさんは＜はやい＞」
「……」
「？」
「（ツーツーツー）」
　気の短いカメさんは、お頭の弱いウサギさんに呆れて、電話を切ってしまいましたとさ。

ぷんぷんおわり